



勘定人1藩財政をになったスペシャリスト

彦根藩井伊家文書のなかに、「年々御指紙書抜」などの題名を表紙に記した帳面約30点がまとまって伝えられています（写真）。大きさは縦13cm、横20cm。ちよ



▲「年々御指紙書抜」（天保15年（1844）ころ作成）の表紙と本文

うどA5サイズ位の大きさです。中味は写真をご覧の通り、細かい字がびっしりと書き込まれていてとてもややこしそうです。なかには200ページを超える分

厚い帳面もあります。

この帳面は、実は勘定人とよばれる藩の役人たちが記した、江戸時代後期の藩の米・金銀貨の支払い記録です。「御指紙」とは、彦根藩の重役であった家老が出した指令書のことです。「年々御指紙書抜」とは、すなわち、米・金銀貨の支出を命じた「御指紙」の要点を書き抜いたものという意味になります。藩が諸方へ支払ったお米やお金のことが細かく書かれてあるので、例えば藩の御用達商人や職人の名前など、この史料でしか分からない事柄が少なくありません。

江戸時代の藩の収入のほとんどは、藩領の村から納められた年貢米でした。年貢の半分は藩士の取り分で、これで彼らの生計がたてられました。残る半分が藩の収入となり、藩主やその家族の生活費、幕府への負担、下級藩士の給料、藩の役所の運営費用が賄われました。彦根藩の会計はとても規模が大きく、19世紀初頭の史料によれば、藩全体で年間16万両にもなりました（仮に1両＝10万円として現在のお金に直すと160億円）。

藩の財政運営の実務をおこなったのが、「御指紙書抜」を記録した勘定人でした。勘定人は15人ほどおり、宗安寺の

南隣の元方勘定所（現本町二丁目内）で仕事をし、すぐそばの勘定人町（現芹橋二丁目内）に住んでいました。藩から年24俵3人扶持（＝15石）の給料を与えられ、同じ家が代々勤めました。

「年々御指紙書抜」など勘定人が作成した帳面の内容をみると、彼らが算術と筆記に高い能力を持っていたことが分かります。また、個々の村での年貢の算出法や、村の過去のデータ、年貢米を金銀に替えるための米相場に関する事など、詳細かつ膨大な量の知識を蓄積しています。このような仕事をするための技術や知識は、勘定人個々の家や、勘定人町に集まって住む勘定人グループによって受け継がれ、保持されていきました。彼ら勘定人が藩財政実務のスペシャリストとして、その実質的な担い手であったことは間違いありません。

彦根藩の組織運営の実態については、実は未開拓の研究分野です。この点を知るためには、「年々御指紙書抜」のような史料を丹念に読み込み、勘定人などの実務役人の仕事の様子を明らかにしてゆくことが重要だと思われま

（彦根城博物館学芸員 渡辺恒一）